2020.9.30 第2回研究会 NEWS LETTER

国際教養学部 言語文化学科



研究会再開のごあいさつ

研究会運営担当 浅山佳郎

国際教養学部は2007年に開設されました。前身となった外国語学部言語文化学科は1999年に、それまでの「教養部」的な組織を学科へと編成しなおすことによって設置されました。よって国際教養学部も、その基に大学における専門課程の前梯である教養課程があり、その一種の「制約」の中で、学部としての理念やカリキュラムを形成しなければなりませんでした。

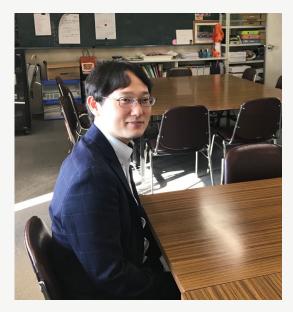
開設後もうすぐ15年目を迎えようとしています。教員スタッフも大幅に代変わりしました。 その意味では旧教養部の「制約」はそろそろ消失しようとしています。それは同時に、制約の ない中で学部の理念とカリキュラムが問われ続けるということを意味します。

本学部を開設した時点での理念は、取得学位を「学士(外国語学)」という外国語学部言語学科時のままに置いたように、環太平洋地域の複言語を使用することができ、異文化への柔軟性をもつとともにそこに対して日本からの発信ができるような人材を養成するというものでした。学部の理念は永続的に維持されなければならないものではなく、不断に検討されるべきものです。そしてその検討の結果としてカリキュラムも不断に改新されるべきものだろうと思います。そのためには同僚の教員がどのような問題意識を以て研究にあたっているかを知り、それと自分の研究とをどう関わらせて全体としての「教養学」を作りあげていくかを考える、そうした営為が必要だと思います。

学部開設時にあった学部研究会については、前号ニューズ・レター冒頭の安井学部長の一文に記されています。15年を迎えようとする時に、研究会を再開しますのは、本研究会が、上述しましたようなカリキュラムとしての教養学を考えるための場として機能させたいと願うからです。

この会の活動を、よろしく楽しんでいただければと思います。

発表後の「言い残し/聞き残し」対談



浅山:ご発表、ありがとうございました。発表後の対談ですが、まず最初に、外部の私たちが全体における位置づけを考えるためにも、歴史学に関わる学会の全体の見取り図を伺えればありがたいなあと思います。

小宮:こちらこそありがとうございました。そうですね、歴史学の一番大きい学会は、史学会という学会で、そこで『史学雑誌』という雑誌が出ています。これが日本で一番伝統のある雑誌で、まさに今回話をした遣唐使研究が出てくる明治以降の初期の段階、1880~90年くらいで雑誌はすでに出ているかと思います。うひとつ大きい歴史の団体としては、歴史学研究会いわゆる歴研といわれるものがあります。

一方韓国・朝鮮研究という枠でいえば、朝鮮学会があります。言語学や人類学など多様な分野の研究者もおり、伝統があって最も大きい学会ということになるでしょうか。朝鮮史では、朝鮮史研究会というものが日本にはあります。こちらは朝鮮史の中では一番大きい学会になろうかと思います。

実はこういうふうにみると日本の学会は朝鮮学会と朝鮮史研究会という二つの学会がありますが、韓国の学会はより細分化されています。

私の専門の時代の古代史ですと新羅、高句麗、百済、渤海、こういう国々があったんですけれども、各国家名ごとに学会があります。百済学会、新羅史学会、高句麗・渤海学会かな、国ごとに分かれています。

浅山:次に今日のご発表について。

大変面白かったんですけど、論じ残されたこととかありませんか。

小宮:ほぼお話してしまったので。ただもしお話できるような部分であるとするなら最後のところだと思います。肥大化された国史の叙述をどのように再構成するかというところですかね。結局自分がなぜ日本と韓国の遣唐使の研究をするのかという問題にもつながるのですが、本質的にその歴史をどう理解するのか、どのように捉え直すことができるのかという事にもうちょっと自覚的でありたいというふうに考えているためにこのような問題意識を提示したということが一番大きいと思います。

浅山:その最後のところでおっしゃった、肥大化した国史の叙述ということについて、もう少し 説明いただけますか。

小宮:肥大化した国史の叙述というのは、近代以降の国民国家によって創出された日本史や韓国 史とよばれる国史の諸問題のことです。国史の叙述で使われる遣唐使という用語には、国民国家 形成後の近代日本や韓国で当時の問題意識が重層的に投影され規定されていました。 このような含意があるにもかかわらず、韓国は、無自覚に日本で創出された遣唐使という用語を使用しています。一方日本の人たちにはこの遣唐使を日本の文脈だけで語っているけれども、果たしてそれは自明なのかという問題が抜け落ちています。さらに遣唐使という用語を広域史的な視点から考えたとき、果たして日韓両国の理解だけで済むのかどうか、という問題へと広がりも持ちます。

肥大化された国史の叙述の再構成とは、国民国家によって押し込められた歴史の見方・考え



方・描かれ方、それをどのように解消していくことができるのかという点にあるかと思います。

浅山:私は「遣唐使」って、ずっと普通名詞だとばっかり思っていたんですが、ちょっと違うんですね。たとえば東南アジアから送られた使節というのは日本語で表現すると何て言うんですか。

小宮:入唐使、でなければ、遣使朝貢などというように、遣使する、使節を派遣する、あるいは朝貢するという書き方をして、具体的なその派遣国や地域名を書いたりしないものが多いと思います。

浅山:そこですごくおもしろいのは、「遣唐使」って私の語感だと、一単語にならずに MISSION SENT TO TANG CHINAっていうフレーズです。そういう点でも教えられるところ が大きくて。

小宮:先生から目的語の置き方として入唐使と遣唐使を比べて、遣唐使ですと文法をみておかしいとおっしゃっていただいて、安心しました。他の分野の先生からそういうことおっしゃっていただけるのは説得的なのでとても心強く感じました。ありがとうございました。

浅山:いえいえ、こちらこそ。もうひとつ。小宮先生から見て遣唐使というものをあえて取り上げて歴史の記述にしていくのはどういう世界観だったんだと思いますか。

小宮:上手にお答えできるか、ちょっと難しいんですけれども、私の世界観の見方というところでお答えできればと思います。おそらく日本が島国、境界が明示されやすい国家だという問題もあるんだろうと思います。日本は韓国とちょっと違うなと思うのは、思想的にも自他認識をかなり意識するような思想の体系が多いのかなという印象があります。外交は内と外を分ける思想とつながりがありますし、自己と他者と分けてしまう認識につながりやすいのではないかな、というふうに漠然と考えています。

浅山:島国という感じで形成されている。そういう島の感覚というのは、それこそ日本史としてはいつぐらいから形成されるのでしょうか。

小宮:日本史として一体化させる契機っていうのは、様々にあると思うのですが、日本の国内事情としては統一政権などが考えられると思います。自他認識を明確にしていくのは多分そういったものだと思うんですが、明治期に国史を作っていくということが大きな要因の一つではないでしょうか。日本はどちらかというと地域性が強かったと思いますので。



浅山:最後に全然違うことですが、我々は一つの学部としての教養学っていうのを設定してるわけですけども、教養学に対する歴史学、教養学に対する韓国学、これをどのように見ていらっしゃるのか。かつ、先生が期待される学生のアプローチはどんなところにあるのかというお話をお伺いできればと思います。

小宮:まずは歴史学の方からお話したいと思います。歴史学は基礎学問として今まで研究がなされてきたので、歴史の見方・考え方・描かれ方が蓄積されてきたと思います。

韓国・朝鮮史という立場で行うときにも日本史や広域史のなかでどのように比較したり位置づけたりするかを考えるときにその際の見方・考え方・描かれ方が重要になっていると思います。教養学という点で言えば、社会学や政治学など様々な分野とこの歴史的な見方・考え方・描かれ方がどう繋がるのかが重要なのだと思っています。

現在歴史学は諸分野との結合という点で学問の方向性に関しては岐路に立たされているという風にも思います。とはいえ歴史学の細かさは、説得性を持ちやすいところにつながると考えています。つまり、近代以降積み上げられた実証主義の歴史学は緻密さにおいて有益だと思いますので、その緻密さが他分野に導入された時に説得的な意味を持つだろうとイメージできるというところでしょうか。大きい学問分野とのかけ橋となるようなところで、歴史学のひとつの良さがあるのかなと思います。

浅山:ディスカッションを形成する時の緻密さと説得力としてのこの歴史学的な議論の立て方、 アプローチの仕方というわけですね。これはよく分かりました。

小宮:韓国学の方ですね。韓国学の意義は大きく二つあろうかと思います。ひとつは日本を知るためだということともう一つは世界を見るためだということです。

実はおそらく従来までは韓国学を研究することを極めて日本の問題だと捉えている研究者多かったんですね。日本をより深く理解していくために韓国学が必要だと。これは私もすごく大事なことだと思います。日本にとってみたら韓国というのは切っても切り離せないような関係にありますので、例えば歴史認識問題が起きてもおそらくながく続くでしょうし、そういうことも考えれば、当然日本を知るためのものという側面があると思います。

一方で韓国が成長していくなかで、世界の中でどのような動きにあるのかという点も、やはり見ておく必要があるだろうとも思っています。誤解を恐れずに言えば、K-POPがアメリカで流行するとか、そのような現象も単なる流行などではなくて、なぜアメリカに向かうのか、韓国が今後どうなっていくのかという点を世界の中の韓国の位置づけとしてとらえておくことが重要なのだと考えています。

·**浅山**:よくわかりました。ありがとうございました。

小宮:大変ありがとうございました。

済州島の象徴: トルハルバン (石のお爺さんと いう意味です)

2020年12月16日